

「土木」
濱本 光蔵
HAMAMOTO Kozo

市役所の現役エンジニア
技術の幅を広げるために

バヌアツ最大の島、エスピリトゥ・サント島。シンヤンパンビーチと呼ばれる美しい白砂の海岸や、ジヤングルに点在する濃紺の湖ブルーホールなど、多くの観光名所を擁している。「ここは、日本の10月並みの気候が年中続く常夏の島です。四季がないのは残念ですが、日本よりも過ごしやすいかもしれません」。こう話すのは、昨年10月から、島の南東に位置するルーガンビル市で活動している青年海外協力隊の濱本光蔵さんだ。配属先は、エスピリトゥ・サント島を中心に、道路、橋、港湾などの維持管理を行っている公共事業局サンマ州事務所だ。

JICA
Volunteer
Story

PROFILE

広島県出身。高等専門学校で土木工学を学ぶ。卒業後は広島市役所に入庁し、道路新設工事や豪雨災害の復旧事業などに携わる。2016年10月から青年海外協力隊(土木)としてバヌアツで活動中。

「技術者として公共事業を支える」

南太平洋に浮かぶバヌアツでは、道路や橋などの大規模なインフラ整備を、海外からの援助に頼って進めている。そんな同国で青年海外協力隊の土木隊員として活動しているのが、広島市役所から現職参加している濱本光蔵さんだ。現場での技術支援に加え、事業の効率化やコスト削減などを通じて、持続的に公共事業を行える環境づくりに取り組んでいる。



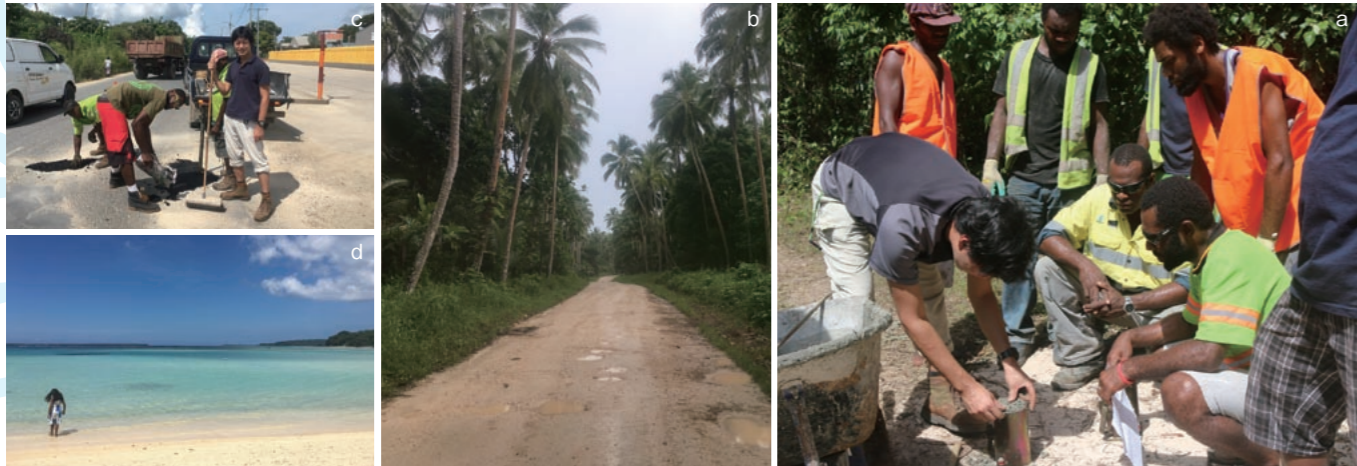
バヌアツ国内の他の州のエンジニアと共に。州ごとにユニフォームの色が異なる

高等専門学校で土木工学を学び、卒業後は広島市役所に入庁した濱本さん。バヌアツに派遣されるまでは、主に道路の新設工事を担当する部署に所属し、広島市で豪雨による大規模な土砂災害が発生した2014年には、災害復旧班の一員として被災した道路や河川の復旧事業に従事した。そんな濱本さんが協力隊を志すきっかけとなったのが、趣味の一人旅だ。「世界各地を旅してきましたが、職業柄なのか、現地の道路の状態や工事現場に目がいつってしまうのです。さまざまな国で経済の根幹を支える社会インフラの重要性を感じ、海外の公共事業に興味を抱くようになりました」

濱本さんは、協力隊を通じて技術者としての経験の幅を広げたいと考え、職場に身分を残したまま派遣できる現職参加制度を活用することにした。「理解ある上司や同僚のサポートもあり、安心して協力隊に参加できました。土木工学は経験工学といわれるほどに多種多様な経験を積むことが大切な分野ですが、日本では行政組織が細分化しているため、一つの部署で担当できる業務は限られています。一方、開発途上国では、計画、施工監理、維持管理といった一連の流れを一人で行っている国も多いので、若手技術者にとっては多くを学べる環境だと思います」と濱本さんは話す。

日本と異なる基準や規格
現場で悪戦苦闘の日々

バヌアツでは、公共工事の設計や維持管理計画の策定などを支援している濱本さん。活動はデスクワークが中心だが、日本と異なる工法や、建設材料や地盤状況などの条件の違いを感じるため、時間を見つけては現場に向き、自らも施工に携わるように心掛けている。例えば、日本の建設現場では、建造物を作るときには日本工業規格(JIS)をはじめとするさまざまな基準や法律に従う必要があるが、バヌアツでは明確な国内基準がなく、必要に応じてオーストラリア



a.現場でコンクリートの強度や耐性について指導する濱本さん
b.バヌアツの標準的な道路。舗装道路は全体の1割にも満たないという
c.道路の緊急補修を行う濱本さん。「事務仕事より現場作業のほうが好きです」
d.エスピリトゥ・サント島の美しい海

の基準を取り入れている。日本で培ってきた知識や経験の活用が難しい場面も頻繁にあるが、日々勉強のつもりで取り組んでいるという。

もう一つ、濱本さんが心掛けていることが、同僚のエンジニアとお互いの国における公共事業の現実について話し合い、時には意見をぶつけ合うことだ。公共事業省サンマ州事務所には、バヌアツ人のフレディソン・ホセアさんと、オーストラリアから派遣されている専門家のラジェス・シャマさんの2人のエンジニアがいる。2人とも仕事に対する責任感や向上心が強く、尊敬できる同僚だという。「ここでは、道路や橋の他にも、庁舎や倉庫などの建物に関する図面の作成を頼まれることがあります。私はこれまで建築図面は描いたことがないので引き受けることができないのですが、同僚のフレディソンさんがパソコンを使って立派な教会の建築図面を描いているのを見たときは、驚きました。海外では土木と建築の垣根が低いのもかもしれません」と濱本さんは話す。

濱本さんは、活動を始めてから半年が経ち、バヌアツが抱えているインフラ事業における問題点が少しずつ見えてきたという。「まず、材料や建設用機材が足りないため、大きな建造物を作るとなると必然的に海外からの援助に頼らざるを得ません。さらに、長期的な施工計画もないため、数年や数十年単位で考えたときの全体費用よりも初期費用に目が向きがちになってしまい、最も効率的な工法が選択されていないように感じます」

現在、濱本さんは新しい工法や効率的な維持管理方法などを提案しながら、公共事業費の削減を目指している。「公共事業は広い意味では国づくりそのものです。他国の援助に頼るだけでなく、その国の人たちが自身が将来を見据えた工法を考えていけるように協力していきたいと思っています」。技術者として、好奇心を持ち続けることを大切にしている濱本さんの挑戦は、始まったばかりだ。